

8) 坂田十松(さかた じっしょう)(1894年～1984年) 富田生まれ。本名実郎。

18歳のとき高井半農の手ほどきで初めて漢詩をつくりました。のちに、普門寺の棚橋石翁禅師に漢学、漢詩を学びます。さらに儒学者八木蓑香に漢詩を学び「王漁洋」清朝風を身につけました。雅号十松(道人)は、明治17年坂田吉郎(十松の父)を訪れた漢学者森春濤の残した扁額「十松郵舎」に由ります。富田教行寺に「築山紅梅」の詩碑があります。後年、北摂漢詩会などを結成し、後進の指導にあたりました。

昭和32年蘭亭賞を受賞。昭和58年高槻市教育文化賞を受賞。

著書に『十松百絶』第1輯～第4輯(遺稿集・坂田篤編)。

9) 大宅壮一(1900～1970)

大宅壮一(おおや そういち)

大宅壮一(1900年(明治33年)～1970年(昭和45年))

富田生まれ。東京帝国大学在学中より健筆をふるい、第二次大戦後、時代の風潮をみごとに裁断する独特な社会評論や人物評論でマスコミの帝王と呼ばれました。自ら“無思想人”を宣言し、明快な是々非々論で広く一般大衆の支持を得ました。新語づくりの名人でもあり、〈一億総白痴化〉〈駅弁大学〉〈恐妻〉などの造語多く生み出しました。死の直前には、大宅壮一ノンフィクション賞が創設され、ライターの登竜門となっています。なお、富田の生家近くには顕彰碑(平成21年建立)があり、小寺池図書館には大宅壮一文庫もあります。

10) 西村公朝(1915～2003)

西村兵衛、母ミツの長男として1915年出生、名を利作と名付けられた。

父の実家は米や、雑貨商を営んでおり、父は実家を手伝うかたわら芸事が好きであった。大正11年富田尋常高等小学校に入り、父が東京で雑貨店を開き、彼も東京の芝神明小学校に転校する。

名は利作彫刻家をめざすが戦後仏師となり、昭和27年清蓮院で得度を受け、荒れ果てた愛宕念仏寺を復興し住職に収まるも、戦後の荒廃した多くの国宝や重要文化財の仏像を修復されました。西村公朝氏は、特に国宝の仏像の修復に大きな功績をあげられました。

VG 槻輪としては、令和3年11月「わがまち紹介」活動で「奥嵯峨野を訪問して」で愛宕念仏寺の現住職西村公栄さんから、父上の故西村公朝氏の話聞き、高槻市富田生まれで、非常に縁のある方と知りました。

高槻市の名誉市民に相当すると思いました。